

外から見えない世代交代 - 分子進化の中立説 -

本誌の読者にとっては当たり前のことであるが、PC/AT 互換機を構成している要素は、つねに静かに変わっている。その中でユーザに直接関係が深い OS やアプリケーションの世代交代だけが、一般マスコミやパソコン雑誌を賑わせている。

筆者は2年半前に自作したパソコンのマザーボードの調子が最近悪くなったので、取り替えようと秋葉原に出向いた。実はその前に、台北の新しい電腦街の新光華商場に出張中の夕刻の時間を利用して立ち寄ったが、この古いマザーボードの代替となる製品を見付けることができなかった。

今回はパソコン・パーツのショップを徹底的に探したので、交換用のマザーボードを入手することができた。確かに 130nm ルールの Socket A CPU のマザーボードなどは時代遅れではある。でも自作した当時には、いちばん売れていて安価だったチップとそれに適合するマザーボードを買ったのである。

CPU の外の、チップセット、VGA、DRAM、HDD などのおもなパーツだけでなく、細い部分に至るまでどんどん変わってきている。

遺伝子の世界では外部に発現しない内部の変化が溜ると、最後の一つの変化がきっかけになって、突然新しい変種が発生することがある。突然変異による進化である。故木村資生博士は分子進化の中立説でこの機構を説明したが、パソコンもこれに似ている。

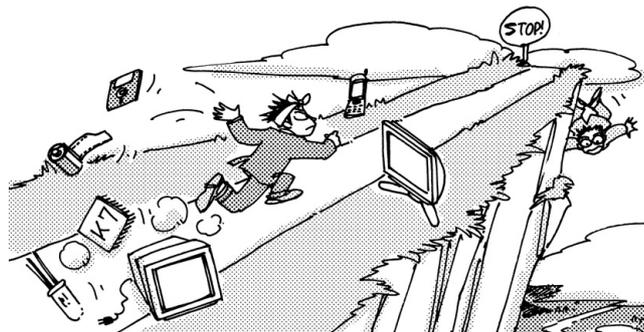
一般ユーザから見える世代交代

一般のパソコン・ユーザから見えるハードウェアの世代交代では、USB の導入が大きい。USB はすでに外部機器をつなぐインターフェースとして定着しているだけでなく、USB2.0 で導入された高速化のおかげで、USB フラッシュ・メモリが従来のリムーバブルな記憶媒体を置き換えてしまった。

また、筆者のところに Windows 95 以前に 17 万円で購入したプリンタは、Centronics 社のインターフェースが使われている。しかも、これがなかなか傷まない。ドラムの交換だけで現役で使ってもらえる。さすがに 300dpi という解像度は不足気味ではあるが、気にしなければよい。

しかし、自作のパソコンでないと、このプリンタのインターフェースが付いていない機種が増えてしまった。USB-プリンタ変換ケーブルを買えばつながると思うが、ドライバが適合するかどうか分からないので、一般のユーザならパソコンの買い換えとともにゴミになる可能性もある。

このようなものに、SCSI(もともと標準搭載のパソコンはきわめて少ない)や 3.5 インチの FDD、MO などいくつかの周辺機器がある。筆者のところに、生きているのに使わなくなった SCSI 接続の周辺機器がいろいろと山積みされている。能力としてはまだまだ使えるのであるが、SCSI 接続を行う手間や



もっと遅くしないと!

コストの問題があり、自然と外されてしまったのである。

さらに、筆者の事務所と離れた場所にある作業所兼倉庫との間をつないでいる 10Base-5 規格の LAN も、接続をサポートしているハブが壊れた後、市場に商品がなくなってしまったので、今は使えない状況にある。FTTH が無線 LAN にしようかと考えたが、コストや安全の面で現場には LAN 接続のパソコンは置かないことにした。

商品の变化速度が速すぎる

多くのユーザにとっては、ある程度世代交代が進んだ後にパソコンを購入しているので、このような旧態依然とした機器を使い回す旧世代のパソコン・ユーザの行動は、理解し難いかもしれない。

ともあれ、筆者は今回のマザーボード交換では、ほかの部品の変更を極力避けた。したがって SATA の HDD の利用や、DDR2 など購入を検討することはしなかった。しかし、あと 1、2 年使う内にこれらの部品の調子が悪くなれば、形態変化を伴わない内的な変化がついに外部にまでその姿を顕にする^{あらわ}ときが来るかもしれない。

生物学上の突然変異による進化とパソコンの技術革新による進歩が同じメカニズムであるとは、決して思えないが、一般ユーザにとっては、買い換えのたびにパソコンが突然変異して、今までの旧機種は淘汰されてしまうというふうに見えるのはやむを得ないかもしれない。

せめて事務機器の法定の耐用年限くらいの間は、突然変異しないでいてもらいたいものである。

現実には、パソコン以外にも自動車やテレビ受像機ですら、まだ使えるのに排ガス規制やテレビ地上波のデジタル化によって、ゴミにしなければならないになっている。

循環型社会の確立が叫ばれているが、目に見える部分での変化を意図的に遅くしないと、携帯電話機のようにまだ使えるものをゴミにする社会から抜けだせないのではないだろうか。

それとも、一日でも早く地球上の資源や環境を使い尽くして、一世紀以前の状態に逆戻りするという道を、人類はまっしぐらに突き進んでいるのだろうか。

(key)